

## 美術の窓(50)

## フランスの近代画家フェルナン・レジェの展覧会を見る

大和文華館館長 吉川 逸 治

フェルナン・レジェの展覧会が奈良の県立美術館で開かれておりましたので、大和文華館の琳派関係の展覧を担当してきた学芸員の中部義隆君とつれだつて、早速見学に行きました。中部君は神戸大学で、フランス近代美術の事情に詳しい池上忠治教授にこの方面の指導をうけているので同行を願ったのです。会場に並べられた作品を見ながら、過去のいろいろなことが次から次へと記憶のうちに湧いてきます。

レジェはマティス、ブラック、ピカソ、カンジンスキーなど近代美術の推進者の一人として、独自の確立した地位を築いています。私は戦前すでに新しい近代建築や絵画、彫刻の制作をいくつもパリやベルリンで見物しました。建築ではペレーのシャンゼリゼ劇場とかランシーの教会、壁画ではモネ美術館などです。近代美術はこれら印象派の後期の作品で始まっています。しかし、いずれも知識階級とか特権階級の目覚めによる試みというような趣があつて、大きく広く民衆を抱きかかえる近代美術の展開といった勢いは感じられませんでした。ところが、このノルマンディー生まれのレジェ先生が大きなアトリエで数十名の生徒たちを教える姿は力強いものでした。1950年、1951年の頃でしたが、

アメリカに四年ほど過ごして帰ってきたことで、当時は生徒に大勢のアメリカ人が混じっていたせい、講評には通訳する助手がいて、あとから英語で繰り返していました。この金曜の講評だけ聞きに行くものも多く、広い教室のうしろの方に入って、芝居の立見見物のように耳を傾けて、先生の大声で演説調でやる講評を聞きます。前方に低い壇があつて、そこに三人ほど体格のよい大きなモデルがいろいろ制作の種類に従つて、ポーズを変えて、モデルはもちろん裸ですが、腰だけ覆うパンツをつけて、長い脚や腕が姿態の組合せが変わるたびに胴体のまわりに動き、動勢のリズムを変えます。静的な造形の制作のうちに、レジェは強い生命のリズムを伝達しようとするのでしょうか。四年間すごしたアメリカの印象を混じえて、叱咤するように大声で言います。あすこで、人間は強く生きている。激しく働く。ここのようにぬるま湯につかる暮らし方ではないんだと。彼は制作のなかに力強さと動勢をもとめて、生徒達を激励していました。

かつて、パリ大学で同級だった友人の美術批評家ヴリナ君につれられて、レジェを訪ねたことがあります。大きな足場（電線架設塔？）に人々が登って仕事している

画面が一方の壁にかかっている、その下にテーブルをおいて仕事をしていました。床にはいちめんに大構想のいろいろな場面の素描が散らばり、電線を何本も支える鉄骨構成の電線架構に働く労働者群から取材した働く人々の大構成の作品を仕上げます。しかも、時に、バックを空の濃い青に塗り、あるいは野原の緑に染め分けて、自然環境を暗示させます。しかし、決して景色を描写し、実景描写という狭い現実には縛り付けることはしません。描かれた人物達と一緒に、「画」の世界を生かしているのです。その点はマティスの画も同じです。野獣派の大家も、立体派の大家も、外界の人やもの実存する姿によりかかきながら制作するのではなく、画をかきながら、画を作り上げていくのです。むしろ、自分達が人や草原、家、森などの形と場所を制作していく態度をとります。そして二十世紀の近代絵画は、もはや遠近法を用いて奥行きをだすとか、ハイライトや陰影法を用いて立体感を出すということはしません。すべて明るい色を平たく塗り、ぼかしなども用いませぬ。レジェ先生から別れに際して贈られた色彩版画は、額に入れて座敷に飾っています。

季刊 美のたより No.106

平成6年2月17日

発行 大和文華館